

## 文献との偶然の出会い

船 津 浩 司

図書館にしろ、書店にしろ、さまざまな分野の本がずらっと並んだ風景がとても好きだ。

何とは無しに書架を眺め、背表紙のタイトルから内容を想像し、面白そうなものがあれば手にとって目次を開き、本文をパラパラとめくる。ただそれだけのことで、何だか自分が賢くなったような気になるから不思議なものである。もちろん、こういったブラウジングは、賢くなったような錯覚を覚えさせるだけではなく、研究のヒントを得るきっかけともなるものである。

筆者の専門は法学であるが、学位を取るために必要な長編論文を書くとなると、ゼロから構築するのではなく、主題のヒントとなる「ネタ本」を見つけてくるのがセオリーである。多くの場合、外国の法状況を論じた外国語の文献がネタ本となる。筆者の学位論文も、ご多分に漏れず、ドイツの法学者の教授資格論文からヒントを得たものだが、これも、図書館の書架で偶然見つけたものである。

もっとも、ここで「偶然」と表現することには語弊がある。数多くの文献一つ一つがきちんと分類され、配架され、管理されているからこそ、ドイツ語の単語の意味すら覚えられない駆け出しの研究者見習いでも、参考となる文献に遭遇することができたのである。偶然ネタ本に出会ったという自らの幸運を誇るのではなく、その運命の出会いを演出してくれた存在にこそ感謝すべきであろう。

このネタ本を参考に、無事に学位論文を書き上げ、それを加筆修正して単著として上梓することができた。研究者たるもの、自分がものした著書・論文が、次の誰かの研究のネタ本となることこそ本望である。しかしながら、先の単著は、法学的見地から書いたにも関わらず、タイトルに「経営」という言葉が使われていたため、書店では「経営・マーケティング」といった分野の書棚に置かれ、図書館の請求記号も日本十進分類表でいえば335が付されることが多い。法学的見地から書いた著書が、他の分野に主たる関心を有する人にとっての「偶然出会ったネタ本」になるようなことがあれば、それはそれでとてもありがたいことではあるが、そうはいつでもデビュー作である。まずもって自分の専門分野の書架に置かれる方が断然嬉しい、というのが研究者としての偽らざる心情であることも、ひっそりと呟いておこう。

(ふなつ こうじ。免許資格課程センター所長、法学部教授)

